

氏名(本籍地)	池田仁子(石川県)		
学位の種類	博士(文学)		
報告・学位記番号	乙第217号(乙文第87号)		
学位記授与の日付	平成29年3月3日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第2項該当		
学位論文題目	金沢と加賀藩町場の生活文化		
論文審査委員	主査 教授	博士(文学)	白川部 達夫
	副査 教授	博士(文学)	大豆生田 稔
	副査 教授	博士(歴史学)	岩下 哲典
	副査 国文学研究資料館教授	博士(文学)	渡辺 浩一

本論文は、近世における金沢を中心とした加賀藩町場の生活文化を究明したものである。なお、生活文化については、子育て、冠婚葬祭、通過儀礼、年中行事、教育、学問、文化など実生活に即した文化や生活そのものを含めた文化を称している。

第一編は「城下町金沢の生活文化と女性」として、加賀藩主から家老家、儒者、寺家、町家など幅広い視点から、テーマを追求している。

第一章では、近世では大名家の存続について、藩主の再生産が極めて重要で、次期藩主となる子弟の養育には細心の注意が払われたとして、加賀藩の御抱守や年寄女中制度の展開を明らかにし、さらに前田吉徳(利家から数えて6代目藩主)の幼少の養育記録を紹介し、その実態を明らかにした。第二章では、藩老横山家の家臣団の存在形態と主家を中心とした屋敷配置、さらには家臣団の生活の様相を紹介している。大大名であった加賀藩前田家には、大名クラスの家臣が数名おり、その家臣(陪臣)も多かった。これら陪臣の実態については、史料の欠如から不明な点が多いが、彼らの屋敷や他大名の家臣などとの婚姻関係、勤務実態が明らかにされている。第三章では、藩老横山家の出産と女性の働きが検討されている。武家における出産と直後の諸祝いの規式とこれに関わる、家臣、女性の役割、贈答の様相が明らかにされる。第四章は、藩の重臣今枝家につかえた儒者金子鶴村を事例に、金沢における生活と情報収集を論じている。鶴村は、加賀の在郷町鶴来の町家に生まれ京都に学んで、小松の郷校の教授となり、文化元年(1804)に今枝家の儒者として招かれて金沢に住んだ。同人は『鶴村日記』という日記を残しており、これにより鶴

村を中心とした当時の加賀藩内の文化的交流の状況をうかがうことができる。以後、鶴村の人間関係などが伏線となり、さまざまな階層の生活文化へと検討が広がられている。ここでは鶴村の経歴、金沢での生活、海外・近海情報の収集状況などを検討している。鶴村は、儒者ではあったが、絵画も学び、心学、蘭学にも関心が深く、文人的な人物であった。海外情報収集はこうした交流の中で行われたものであった。ことにレザノフ来航の情報など天保期以前の海外情報収集が明らかにされたのは貴重である。第五章では、金沢の浄土真宗寺院瑞泉寺文書の調査から、瑞泉寺をめぐる女性たちの生活史を婚姻、その後の生活、交際などを中心に明らかにしている。第六章では金沢の有力商人（家柄町人）で薬種商の宮竹屋亀田家の日記により、年中行事や通過儀礼と女性の活動や婚姻・葬儀、奉公人・乳母、文人との交流などを紹介している。第七章では、文化四年心学者脇坂義堂が金沢に來訪したことを契機に加賀藩では、藩主自らが修養して、心学が隆盛となった。これらの過程を『鶴村日記』などから明らかにした。

第二編は「各町場の暮らしと文化」というテーマで、金沢周辺の町場について検討が行われている。第一章では、金子鶴村を中心とした加賀文人サロンの形成を跡づけている。加賀では藩主を中心とした武家文化に焦点が当てられることが多いが、ここでは鶴村という儒者と、これを支えて文化交流をもった在郷町の町人や下級武士、豪農など、また加賀に來遊した脇坂義堂、浦上玉堂など文人墨客の動向と鶴村の果たした役割を解明して、庶民の間の文人交流を解明している。第二章では、加賀藩の城下町小松と湊町安宅を事例に、それぞれの町の成り立ち、生活文化を紹介している。小松では町記録『小松旧記』を比較研究した上で、加賀絹の産地として著名だった小松の絹生産の動向、また安宅では、有力船問屋米谷家の展開などを明らかにした。さらに両町的生活文化を和歌・連歌・俳句や相撲興行などから紹介している。第三章では、北前船の通信文を基に、海運業と家族との交流を探る。『新修小松市史』の編纂の過程で、北前船からの通信文が多数発見されたが、これを整理して、幕末から明治期の北前船の船員と家族の交流がどのように果たされたかを分析している。幕末では、仲間の北前船に託して手紙の交換がなされ、明治に入ると電信になる。本章では、その内容を紹介し、北前船正直丸の一年を通じての発信や海難での対応、留守家族の状況などを解明している。第四章では、金子鶴村の出身地である加賀の在郷町鶴来の生業と暮らし、文化について紹介している。鶴來町は、白山山系から流れ出る手取川の扇状地の要にあり、白山山麓の村々と平野部の村々とを繋ぐ役割を果たしてきた町場で、古くから加賀菊酒の産地として酒造業が発展し、また煙草産業も展開した。その様相を紹介し、町の組織や鶴來の人々の金沢への進出、周辺都市との交流などが明らかにされている。第五章では、鶴村の出身の前提となった町人の文化活動、鶴村の『白山志』『白山遊覧図記』の作成、幕府への献上一件の経緯、町人を中心とする俳諧流行と俳額の奉納などが説明されている。第六章では、金子鶴村の長男で、鶴來の実家を継承して、鶴

村の活動を支えた角屋清兵衛の染め物商売、鶴村を介しての文化活動、鶴村没後の鶴来社中の活動などを紹介している。

池田氏の研究は、これまで加賀藩ではあまり重視されなかった庶民の生活文化の諸相やそのなかの女性のあり方などを多様な面から具体的に明らかにしたことに独創性が認められる。また藩主・家老家などの子弟の出産・養育など、重要でありながら、論じられることのなかった藩政の前提となる人物そのものの再生産の分野に踏み込んだことも評価できる。この点では、加賀藩の御抱守や各階層にわたる女性の活動を明らかにしたことはなどは、新しい研究分野を切り開いたといえるものである。その分析態度は、関連事実を細大漏らさず網羅して組み立てる緻密なものである。ここで明らかにされた加賀藩の生活文化の諸相をもとに、さらに一層発展させて近世の生活文化史に踏み込むことが期待される。本論文は多年にわたる地道な実証研究の成果であり、文学研究科（史学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。従って、論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって池田仁子氏の博士学位請求論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。